

プログラム委員長からのメッセージ

インターネットカンファレンス(IC)は、1996年に第一回が開催されてから、去年で20回(20年)を迎えました。主題をインターネットに関連する技術とし、計算機のソフトウェア、ハードウェア、理論の分類などに捉われず、運用手法(オペレーション)、社会学に至るものまで幅広く、インターネットに有用な技術・知識を議論する学会として運営されてきました。

一方で、我々IC2016のプログラム委員長は、日本のインターネット系学会の世界へのインパクトの低さをとても憂えています。世界に影響を与え、外国人研究者が注目し、彼らが採録を目指すような学会を日本に作りたい、もしくは日本の学会をそのように変えたいという願いがあります。

現在の国内で開催される多くの学会は、どのような参加者にもオープンで、議論は友好的になるように努め、結果的に新しく研究を始める人向けの入門者向けの学会となっており、残念ながら研究成果の発信場所として世界的に大きくインパクトを残すまでには至っていない、と感じています。これは、ICも例外ではありません。

この状況を改善するために、まずは少なくとも日本の若い研究者(学生)たちにとって価値のある学会を作るためにはどうすれば良いか、ということについて真剣に考えました。そして、幾つかの新しいアイデアをIC2016で実現したいと考えています。

アイデアの核となるものは、IC2016では日本の中でも最高クラスの査読者を集め、1論文投稿につき6件程度のレビュー(査読)を論文執筆者に返す、というものです。質の高いレビューが多く、論文・研究への手厚いコメントが貰えるならば、論文執筆者にとっては投稿するメリットが十分に生まれる、という事を期待しています。これは、たとえ、国際学術界が今現在ICの論文を読んでいない、ICに注目していない、という状況だったとしてもです。

日本の研究者の能力は世界トップレベルと比べても遜色はありません。日本最高クラスの査読を実現すれば、世界トップレベルと遜色ない科学技術の議論の場が実現できると考えています。そして、世界トップレベルの科学技術議論の場を(数年程度)維持できれば、そこが生み出す論文集にはある種の信頼が生まれ、ICが出す論文には注目しよう、となると期待しています。

学会のそもそもの価値である、知性による査読を売りにして、学会の価値(ブランド)を高めることを目標とします。「落ちたけど、ここまで真剣に見てくれたのであれば腹が立たない」、と投稿者が思えるような学会を目指します。そのために、優秀で情熱があり、国際トップカンファレンスでの論文投稿や論文査読にも経験値の高い研究者を、査読者として集めました。彼らに、丁寧な査読をお願いし、一行コメントでリジェクトなどはしないように依頼しています。論文のどの部分が良いのか、悪いのか、どのようにすればより質の高い論文になるのかについて、丁寧で建設的なコメントがもらえるはずです。

論文執筆側、投稿側にも、新しく条件をつけます。

- 1) 評価の章がフルで3ページ以上あること。

2) 参考文献が10件以上あること。

フルで3ページというのは、4ページ目真ん中から7ページ目真ん中が評価部分、ではダメだということです。4ページ目真ん中からであれば、7ページ目の終わりまで、つまり8ページ目以降まで評価部分が続かなくてはなりません。この時、5、6、7ページがフルで評価のページとカウントされます。

論文投稿は、国際学术界へのインパクトという元の目的を考え、英語での執筆・投稿が推奨されます。しかしながら、ICがこれまで担ってきた、日本語によるインターネット技術の議論の場という役割を考慮し、日本語での投稿も許容します。技術的には高いレベルだが、英語のテクニックの問題で国際学会に届かないような論文については、英語のテクニックおよびプレゼンテーション作法についても含めた有用な査読コメントが受けられることでしょう。

我々は、科学者倫理についても率先して遵守していかなければなりません。言語を変えての二重投稿なども推奨されません。ICに採録されてしまえば、同じ内容で他の国際学会に投稿することはできません。そのため、同じ内容で英語で国際学会に出したい論文であれば、ICに採録される前に論文の取り下げ (withdraw) を行ってください。この場合でも、IC2016の査読コメントは有用なフィードバックになることでしょう。また、30%以上の改変・編集を行うなど、内容に更新が見られるならば、(受け側の学会誌等の規定によるところですが) ICの日本語論文をベースに発展した英語の研究論文を投稿することは、一般的にも許されることでしょう。

この方針は、少なくともICにおいて、2016、2017の二年間は保持される予定です。我々は、インターネット技術のための健全で重要な学会を実現するため、努力していきます。

IC2016プログラム委員長 田崎創、小原泰弘